

niponica

Discovering
Japan

no.

29

にほにか



特集

日本の心を結ぶ

niponica にほにか^{no.}29

contents



特集

日本の心を結ぶ

- 04 さまざまな想いが込められた日本の「結び」
- 08 贈る心を「結ぶ」－折形／水引細工
- 12 装う心を「結ぶ」－帯結び／組紐
- 16 技に磨かれた「結び」の美－飾り結び／竹垣結び
- 18 人と人、暮らしを「結ぶ」－橋
- 20 にっぽん地図めぐり
縁結びの地
- 22 召し上がれ、日本
茶巾寿司
- 24 街歩きにっぽん
日光
- 28 ニッポンみやげ
花器

表紙／金と白の水引とよばれる紐で結んだ鶴に、縁起が良いとされる稲穂や扇、松などをあしらったお正月飾り

写真●ピクスタ

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にほにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。
日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

no.29 R-021204

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>



▲ 長寿の象徴として尊ばれてきた鶴や、初春を彩る梅の花の形に結んだ水引細工

特集

日本の心を結ぶ

日本人ならではの美意識を反映させながら、時代を超えて、受け継がれてきた「結び」の数々。その一つひとつの結び目には、深い祈りや生活の知恵など、多様な文化が織り込まれています。世界でも類がないユニークな精神文化を紐解きます。

さまざまな^{おも}想いが込められた 日本の「^に結^{ほん}び^{むす}」



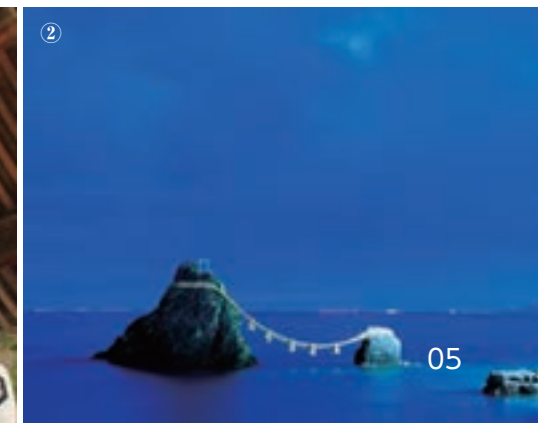
▲^{いの}祈りを「^{むす}結ぶ」

天ノ磐盾（あまのいわたて）という険しい崖の上に、聖なる場所を示すしるしである注連縄で囲われたゴトビキ岩がある。この地（熊野）の神様が、最初に降臨された場所と言い伝えられている。神倉神社(熊野速玉大社)／和歌山県

写真●ピクスタ

① 稲から大切に育てた膨大な量の藁を結び、つくりあげられた巨大な注連縄。出雲大社／島根県

② 注連縄で結ばれた二つの岩が、寄り添う夫婦のように見える夫婦岩は、夫婦や家族円満の象徴。二見興玉神社／三重県





▲つながり^{むす}を「結ぶ」

新郎と新婦、両家の新しいつながり^{むす}を結ぶ結婚式。
花嫁の胸元に見える紐は、固く結べてほどけない「あわじ結び」

写真●ピクスタ、ゲッティイメージズ



▲景色^{けしき}を「結ぶ^{むす}」

竹の節をバランスよく並べ、周囲の景色との調和を考えながら、黒い縄で結んでいく。竹の径／京都府



▲装^{よそお}う心^{こころ}を「結ぶ^{むす}」

8世紀ごろに装飾品として発展した組紐は、のちに数十kgもある
武具を支える頑丈な紐として活用された



▲贈^{おく}る心^{こころ}を「結ぶ^{むす}」

水引とよばれる紐を使い、縁起が良いとされる梅の花の形に結んだ祝儀
包み。津田水引折型／石川県

贈る心を「結ぶ」



親しい人へのお祝いや、お世話になった方へ感謝の気持ちを伝える贈り物。贈答文化は、日本人が古くから大切にしてきたものの一つである。その心や習慣を形として表し、今に伝えてきたのが「折形」であり、華やかな結びで祝いの席を彩る「水引細工」である。

▲写真は、「銚子、提子（ひさげ）飾り（銚子とは酒を注ぐための器、提子は酒を持ち運ぶための器）」とよばれる、装飾性の高い折形。2羽の蝶が仲良く舞う姿にならない、対で使われる

折形

▼現代でも、お祝いのお礼や、おもてなしなどのシーンで使われている様々な「折形」



折形とは、贈り物の包み方や、それを留める紐の結び方などを細かく定めたもので、600年以上の歴史を持つ。礼儀作法の一つとして、武家の家々に受け継がれ、のちに庶民の暮らしにも普及していった。

包み方は、受け取った相手が、利き手で開けやすい形になるよう配慮しながら包む。また、包みの一部を開けておくことで、品物がひと目でわかるようにするのも、相手への心づかいの表れだ。

折形では、どんなに複雑な包みも、鋏を一切使わない。和紙を幾重にも折ることで包む。使う和紙は、相手への敬意を表すため、贈る相手の位や贈り物の格に合わせ、大きさや質を使い分ける。上品で清らかな白い和紙を使うのが原則とされるが、格をさらに上げるために、淡い色の和紙を何枚も重ねて使うこともある。



一枚の和紙から生み出される折形は、紙の芸術といえる。写真は、祝いの儀式に用いられる包み方

左／高価な帯を包んだ華麗な帯包み

中／今では姿を見ることがきわめて稀な本物のし鮑（細長く剥いて伸ばした干し鮑の事）を、古文書の記録に基づき再現した「し鮑包み」

右／神様にお供えする食べ物の一つである鰯節（鰯の身を乾燥させた保存食品）の包み

包みを結ぶ紐は、かつて公家では、麻ひもや絹紐が使われ、武家では、和紙を撚ってつくる紙撚りが使われた。後年になり、糊で固めた紅白や金銀の水引などが用いられるようになった。

日本の伝統文化として受け継がれてきた「折形」は、包む贈り物ごとに形が決められている。しかし、「折形」が伝える心は、形にとらわれず実ののびやかだ。贈る相手への思いやりは、現代の日本人の心の中に生き続けている。



左／切り取ったばかりの旬の草花の、ありのままの風情を届けるための「草花包み」

右／筆など、武家の生活に必要な消耗品をさりげなく包んで渡す、折形らしい包みの一つ

▼山根折形礼法教場 宗主・山根一城氏
歴史的背景に基づいた、和紙文化としての折形礼法の原則や魅力を、現代生活の中に普及するための活動に精力的に取り組んでいる。
「折形とは、人間関係をより良くするために努力し、尽くす心。相手をおもいやる心こそ、脈々と伝わる折形の精髓」と語る

作品はすべて、山根一城氏のもの



水引細工



▲ 水引

基本的な水引結び



左／お祝いの水引の基本の結び。一度結ぶとほどけにくい「あわじ結び」
中／「結び切り」は、お祝いの気持ちを気軽に贈りたいときの結び方
右／寄せては返す波のように、良いことが重なるようにと願いを込めた「より返し」。結婚以外のお祝いに使う

水引とは、細く切った和紙を、らせん状にねじりながら紐状にし、糊をつけたもの。しなやかな上、簡単には切れない強度があるため、さまざまな形を結ぶことができる。

日本における水引の起源は諸説あるが、7世紀初頭、日本の朝廷へと献上された品に、紅白に染めた麻糸がかけられていたことがはじまりといわれる。やがて、糸に代わる紐として水引が使われるようになると、糸ではできなかった華麗な飾り結びが可能になり、独自の進化を遂げていった。

日本では、結婚の約束がかわされると、結納という儀式を行う習慣がある。双方の家族同士が顔を合わせ、新たな絆を結ぶためのものだ。このとき、結納品とよばれる贈り物を届けるのがならわしになっている。特別の想いが込められた品々を、美しく飾るのが水引細工である。

長寿を表す鶴や亀、冬にも青々としたままの松や竹、春に先駆けて咲く梅は、日本では縁起が良いモチーフであり、結納品には欠かせない水引細工として、祝いの席に彩りを添えている。

▼ 水引細工は、石川県を代表する伝統工芸の一つ。写真は、お祝いのお金を包む祝儀包み



祝いの席を華やかに彩る水引細工。
結納品の一例から、一つひとつの品々に込められた
祝福の想いを紹介しよう。

友白髪

丈夫で切れない本麻糸を束ねたもの。夫婦そろって、白髪になるまで仲良く暮らせるようにとの祈りが込められている。



末広

末広とは、扇のこと。末永く幸せに、これからますます両家が繁栄するようにとの願いを込めて贈られる。水引の長さは約90cmだが、途中で切ることは絶対にしない。水引を「縁」そのものと考えているためだ。余ったときには、このように、先をくると巻き上げて長さを調整する。

結納金包み

包みの中の箱にお金を入れるようになっている。金額は、あとから数字を修正できないよう、ひと筆で続けて書くという習慣が、今も残っている。



指輪入れ

心のこもった贈り物にふさわしい、華やかな「あわじ結び」の水引細工。



こんぶ

こんぶは、日本では、「よろこぶ」の語呂合わせとして、祝い事で使われることが多い。子孫繁栄の象徴とされている。



作品はすべて、津田水引折型（石川県）のもの



創業から100年あまりの歴史を持つ津田水引折型は、伝統的な折形の基本に従いながら、創意工夫を重ねた美しい水引細工で、現代の暮らしにマッチしたお祝いの心を結び続けている。写真は、5代 津田六佑氏。「結納品は、両家が心を通わせる大切なもの。それぞれに意味があり、少しでも美しく仕上げるのが、お祝いの一部になると考え、心を込めて結んでいます」と語る



浮世絵の祖といわれる菱川師宣が描いた江戸の女性が、ふと足を止めて振り返る姿から、当時のファッショントレンドを知ることができる。結んだ先が左右に長く垂れた帯は、人気の女形役者だった上村吉弥がはじめた「吉弥結び」。江戸の若い女性たちをとりこにしたという

菱川師宣「見返り美人図」17世紀
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)



帯の素材や人の体型を瞬時に読み取り、一本の帯から、素早く理想的な形に結んでいく

た や し むす
立て矢の字結び



「立て矢の字結び」は、お城の中では右側の肩に帯を立て、城外を歩くときは左側の肩に帯を立てたという

ふくらすずめ
ふくら雀



「立て矢の字結び」から変化した「ふくら雀」。現代でも、若い女性が着物を着るとき、この帯結びをすることが多い

「結ぶ」

帯結び

18世紀になると、江戸（現在の東京）の人口は100万人に達し、世界有数の消費都市になった。戦のない平和な世の中となり、経済が著しい発展を遂げるなか、生活にゆとりが生まれた町人たちが、文化の担い手となっていった。

ファッションとしての帯結びが誕生したのもこの頃である。それまで、日本の民族衣装である着物を、はだけないようにしるための紐の役割に過ぎなかった帯が、徐々に幅の広い、長い帯へと変化していった。機能だけではない、おしゃれをするための装飾品に姿を変えたのである。織りや色彩、柄など、凝った帯がつくられるようになり、新しい帯結びの流行が次々に生まれるきっかけとなった。

また当時は、武士や農民、職人や商人といった職業による身分制度があり、それぞれの結び方が決まっていたため、帯結びを見れば、身分や職業、未婚か既婚

かなども判別することができた。こうした決まり事の中で人々は工夫をこらし、自分らしいおしゃれを、多様な帯結びの中に表現していったのである。

現在ある帯結びのバリエーションは、100種類以上だといわれているが、その基本の形は、この江戸時代（1603～1868）に誕生したものがほとんどであり、その文化は脈々と受け継がれているのである。

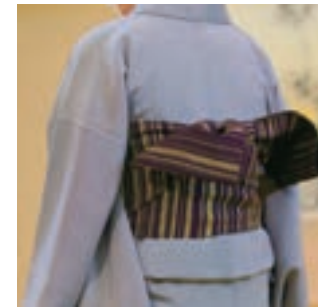


▲ 帯文化研究家の笹島寿美氏。古典芸能の世界で着付けを習得したのち、半世紀にわたり、日本文化における帯結びの歴史や意義を探究してきた。「その人の精神を結び、人としての姿勢を正すことに通じると思う」と語る



▲ 日本では、毎年1月になると、20歳を迎えた若者たちを祝福する「成人式」が各地で行われている。女性は袖の長い、振袖と呼ばれる着物を着て、この式に参加する人が多い。写真の帯結びは、「立て矢の字結び」や「文庫結び」を、現代風にアレンジしたものである

ぶん こ むす
文庫結び



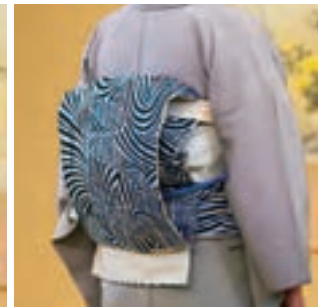
「文庫結び」は、しっかりと結べて、ほどけにくい。控えめでありながら凛とした雰囲気、武家の女性の心意気を表していた

つの だ むす
角出し結び



女性らしいふっくらとしたやさしい表情の「角出し結び」は町人の結び

たい こ むす
お太鼓結び



「角出し結び」を基本に、帯結びを固定するために紐を使うことで簡略化させながら進化したのが「お太鼓結び」。幅広の層に広まっていった

かた
片ばさみ



簡単に結べてなかなかほどけない「片ばさみ」は武士の結び。刀を腰の帯に差すと、いちだんと腹が締まり、姿勢も良くなる



▲ 武士が、刀に巻き付けていた下げ緒



▲ 1652年の創業以来、360年にわたって東京・上野で組紐づくりを続けてきた道明の店頭には、常時500種以上の帯締めが並んでいる

組紐

撮影●瀧島洋司 写真●ゲッティイメージズ、アマナイイメージズ

組紐とは、絹糸や綿糸を組んでつくる紐のこと。8世紀に貴族の間に根付き、やがて、高度で多彩な組み方が考案され、装飾文化として発展を遂げていく。優雅で精緻な美術品として衣装や仏具を飾り、貴族の太刀を下げるための紐などとしても使われた。12世紀、武家社会になると、強度の高さやしなやかな締めまり具合など、美しさだけではなく組紐の実用面が武士たちに評価され、鎧など数十kgもある重い武具を

支える紐として活用された。17～18世紀、江戸（現在の東京）では、下げ緒とよばれる、刀に付帯する組紐が盛んにつくられた。武具は、自分でつくることが武士の心得とされていた為、組紐の技術を習得していた武士が多くいたという。刀の携帯が1876年に禁じられると、それまで下げ緒をつくっていた職人や商人は仕事を失うこととなった。そこで彼らが注目したのが、下げ緒の仕様とよく

似た帯締めである。帯締めとは、帯結びを固定させる為に帯の中央に最後に締める紐のことである。帯締めを必要とするお太鼓結びが女性に幅広い支持を得たこともあり、組紐は新しい需要を得て活気を取り戻していった。こうして帯結びの名わき役となった組紐は、急速な発展を遂げ、現代でも日本の和装文化になくてはならない存在感を発揮している。

▼ 帯の中央に、最後に結ぶのが帯締めである



左／組紐は、すべて手染め、手組みによるもの。職人の手による糸組を守り続けている

右／組紐の上に文様や文字を表す技法は、江戸の人々の粋な好みを反映し、新しい文様を生み出した



▲ 道明の10代目・道明葵一郎氏。
全国に残る歴史的組紐の技術を模範としながら、新しい組紐の製作に従事している。
「わずか数cmの小さな組紐に、日本人特有の美意識が込められている。異素材との組み合わせなど技術的な挑戦もし、現代の暮らしに沿った新しい結びをつくっていきたい」と語る



▲美しい飾り結びの姿をしながら、鍵の役割を果たした「封じ結び」



▲茶道の茶入れ袋や小物入れの紐は、江戸時代（1603～1868）に「花結び」本来の美しい技が磨かれていった



◀ 結びの研究家であり、日本の季節や行事を結びで表現するアーティストの関根みゆき氏。古代の儀式や行事などにおける結びを、古文書などをもとに再現する創作活動を展開している

技に磨かれた

飾り結び

一本の紐を結ぶことで鍵にもなる。美しい花にもなる。そしてまた、どんなに複雑に結んでも、ほどけば一つの紐に戻る。飾り結びは、日本人の繊細で洗練された手先の技により、長い歳月をかけて、美しい変身を遂げてきた。

創作的で美しい飾り結びは、12世紀には貴族の女子のたしなみと考えられ、大切な習い事の一つとされていた。この頃は草花をかたどった「花結び」が主流であった。

華やかな花結びの歴史に劇的な変化が訪れたのは、戦国時代（15世紀末から16世紀末）である。当時、茶道を重んじていた武将たちが恐れていたのは、お茶に毒をもらえることだった。そこで武将に仕える茶道家たちは、お茶を入れる袋の紐を自分にしかわからない複雑な方法で結ぶようになった。万一ほどくことができても、同じように結びなおすことができないため、袋を開けたことがわかるという仕組みだ。記録を残さない幻の結びは、「封じ結び」とよばれ、たった一本の紐で見事に鍵の役割を果たしたのである。



◀ 薬玉とは、お香と薬草を入れた袋に、5色の糸を長く垂らしたもの。写真は、薬玉を組紐で結んで表現した作品

作品はすべて、関根みゆき氏のもの

「結び」の美

竹垣結び

竹で編んだ垣根を竹垣という。竹垣は、敷地を仕切るという垣根本来の役割を越え、庭の風情ある背景として無数の日本庭園を彩ってきた。江戸時代中期には、竹垣が浮世絵の粹なモチーフとして数多く描写され、一般庶民の暮らしに広がってきた。

竹垣には庭の中が外から透けて見えるものと、中が見えないつくりのものがある。また、しゅろ縄と呼ばれる黒い縄で、すっきりと結んだものの、立体的な結びで飾ったものの、結んだ縄の先を長く垂らしたものなど、結び方も多様だ。どれも竹と縄目の色のコントラストが美しく、四季折々の豊かな色彩と響きあいながら、日本の街の景観に独特の味わいを加えている。



▲日本庭園の名所、光悦寺（京都府）にある竹垣。割り竹を粗い菱形に組み、向こうが透けて見えるのが特徴

秦造園の秦民樹氏。今では数少ない竹垣づくりの技を継承する作庭家として、歴史的な価値を持つ日本庭園の復元整備などにも従事している。竹垣づくりでは、縦に並べた竹の節が左右と重ならないようにリズミカルに配置。また黒いしゅろ縄は、結ぶ間隔や強度などを計算しながら結び方を選び、機能性と美しさの両立をめざしているという



▲建仁寺垣。京都にある美しい庭と竹垣で有名な寺の名前が由来。周囲の喧騒を隔て、ひっそりとした空間をつくり出している



◀多様な結びを使い分けるのも、職人技の腕の見せどころ



人と人、暮らしを「結ぶ」——橋



▲ 自然と共鳴し合う木造5連の錦帯橋



日本の橋梁建設は世界に誇る技術の一つだ。立ちはだかる幾多の困難にも屈せず、夢を可能にしてきた橋は、日本の各地で無数の人々の暮らしを結んできた。

錦帯橋

錦帯橋は、山口県岩国市の錦川に架けられた5連の木造の橋である。長さ約200m、幅5m、中央の3連はアーチ型になっている。この優雅な建築構造が錦の帯のように美しいことから、錦帯橋とよばれるようになったともいわれている。橋のアーチ式構造は、選りすぐりの良質な木材6種と錆びにくい特別な金具を使用し、また近代の橋梁建築の基準から見ても、非常に優れた工学技術の一例といわれている。

流されない橋をつくりたいという情熱から生まれた錦帯橋は技術の結晶である。1600年ごろから、人々は何度も橋をかけてきたが、洪水による流出が繰り返されてきた。広い川幅と激しい急流にも流されない橋をつくるため、橋脚のないアーチ橋の研究がはじまった。その結果、考案されたのが、川に4つの石積みの島を築き、5つの橋を支えるという、今の姿である。橋脚は、流れが弱い川の両端に設置し、中央に橋脚のない3つのアーチ型の橋を建設した。構想から約10年の歳月を費やし、1673年、錦帯橋

は完成した。

しかし、わずか1年後に橋は流出。すぐに石積みの橋脚の基盤を改良し、より強く生まれ変わった橋が架けられた。その後、1950年に大型の台風による流出まで、276年もの長い歳月を耐え抜いてきた。

日本三名橋

錦帯橋は、長崎県の眼鏡橋、東京の日本橋とともに、日本三名橋とよばれている。



- ① 錦帯橋は、夜にはライトアップされ幻想的な光景を眺められる
- ② 長崎を代表する観光スポットの一つ、眼鏡橋
- ③ 架設当時、日本橋は、要衝5街道の起点とされていた。日本橋の上空にある高架橋の撤去作業は、2040年に完了する予定である

1953年に再建された錦帯橋は、約350年前の創建当初の面影を今に伝えている。

5連の橋が奏でるリズムカルな造形美の背景には、豊かな自然が広がり、春は桜、夏は花火、秋は紅葉、冬は雪景色と四季の絶景を眺めることができる。



① 下から見上げると、橋を構成する木材が複雑に組み合わされている様子がわかる

② 橋を渡ると、アーチの急斜面や階段が目の前に広がる

写真●ピクスタ



縁結びの地

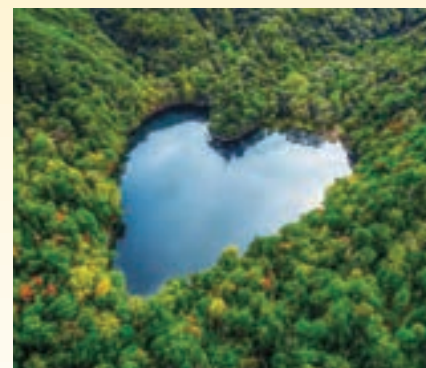
「縁」とは、人や物事との関係性やつながり、絆などを表す言葉。素敵な恋人や仕事にめぐり逢いたい。家族や友人といつまでも仲良く暮らしたい…。そんな、さまざまな祈りや願いが叶えられ、良い「縁」を結ぶことができると伝えられている、日本の縁結びスポットに出かけてみよう。



白兎神社(鳥取市)

日本に現存する最古の書物「古事記」に登場する神話(負傷した白兎が神様に助けられたという古事)の痕跡が随所に残る地。また日本最古の恋物語の地としても知られている

鳥取



豊似湖(幌泉郡)

雄大な原生林に囲まれた湖面を上空から見ると、ハート形に見えることから恋愛が成就する観光地として知られている

北海道



福島

毘沙門沼(耶麻郡)

五色沼湖沼群の一つである毘沙門沼には、赤いハートの模様を持つ白い鯉が生息している。運良く見つけた人は、幸せを引き寄せることができるとして人気を集めている



長崎

眼鏡橋(長崎市)

1634年に架設された日本初のアーチ式の石橋。川に映った影が、眼鏡に見えることが名前の由来。護岸にあるハートストーンを見つけると、願いが叶うといわれている

埼玉



三重

見江島展望台(度会郡)

かさざぎ池の美しいハートの入り江が眺められるのは、この伊勢志摩国立公園内の見江島展望台だけの絶景。ここは恋人の聖地ともよばれ、設置されている鍵台に「誓いの愛鍵」をロックすることができる



鹿児島



知林ヶ島(指宿市)

知林ヶ島は、鹿児島湾に浮かぶ無人島。3~10月にかけての干潮時に限り、約800mの砂の道が現れる。歩いて渡れる縁結びの島として親しまれている



川越氷川神社(川越市)

毎年7~8月になると、2000個以上の江戸風鈴が涼しげな音色を響かせる。結婚式では、赤い結び紐をお互いの左手小指に結び合う独自の儀式がある

華やぐ心を結ぶ 茶巾寿司

▼ 黄色い衣がほどけないように、三つ葉などで帯のように結ばれた優雅な姿は、女の子の成長を祝って行う3月3日のひな祭りなどで、人気のメニューの一つだ



▲ 茶巾寿司には、仕上がりの色の美しさを追求し、特別にブレンドした卵が使われている。その上品な味わいは格別だ



▲ 由緒ある伝統の味を受け継ぐ料理長の佐々木広巳氏
協力：赤坂 有職



▲ 破れやすい薄焼き卵を丁寧に包み、昆布で結ぶ

茶巾寿司は、薄く焼いた卵で、具材を混ぜたご飯を包んだもの。茶巾とは、茶道で茶碗をぬぐうときに使う長方形の布のことである。茶巾に見立てた薄焼き卵を用いたことから、茶巾寿司と命名された。

今から100年ほど前、ある宮家に仕えていた料理人が、茶会において考案したものが好評を博し、それが茶巾寿司のはじまりであるといわれている。

茶巾寿司のご飯には、酢と塩、砂糖で調味した酢飯を使う。ご飯に混ぜる主な具材には、かんぴょう（ユウガオの実の部分を乾燥させたもの）、椎茸などを細かく切って煮たもの、胡麻などに加え、鯛の焼き身や蟹のほぐし身など、風味豊かな山海の幸が使われる。

ご飯を丸くまとめたら、春から夏の間は花豆という大きくて甘みのある豆、秋には甘く煮た栗を上に乗

せ、薄焼き卵で包む。仕上げにご飯がこぼれないように、細く切った昆布を結ぶ。形を整えれば、茶巾寿司の出来上がりだ。

現在では、本来の茶巾寿司にさまざまなアレンジや演出が施され、家族や友人たちの会食の場で多彩なレシピが楽しまれている。ご飯に混ぜる具材も、食べ方も、お好み次第。食卓に笑顔をもたらすひと品だ。



▲ 陽明門の白龍の彫刻



▲ 日光のシンボル、日光東照宮の陽明門

栃木県の北西部に位置する日光市は、毎年、国内外から約1000万人を超える観光客が訪れる。

日光は、標高約200～500mの市街地から、2578mの白根山を最高峰とする日光連山まで、高低差がきわめて大きい。そのため、桜の開花や紅葉の進み具合には差があり、長い期間にわたって、市内のあちこちでお花見や紅葉を楽しむことができる。

市街地でありながら、遙かな昔へとタイムスリップしたような旅の楽しさが味わえるのが、日光杉並木街道

である。この街道は、全長約37kmにおよぶ三つの街道（日光街道・例幣使街道・会津西街道）からなり、両側には約1万2000本の杉の巨木が続く。世界一長い並木道としてギネスブックにも登録されている。植樹から約400年の歳月を経た今も、当時の旅人たちの息遣いが聞こえてきそうな三つの道は、すべて日光のシンボルともいえる日光東照宮へと通じている。

日光東照宮をはじめとする「日光の社寺」は、この他に日光二荒山神社、日光山輪王寺の103棟の「建造物

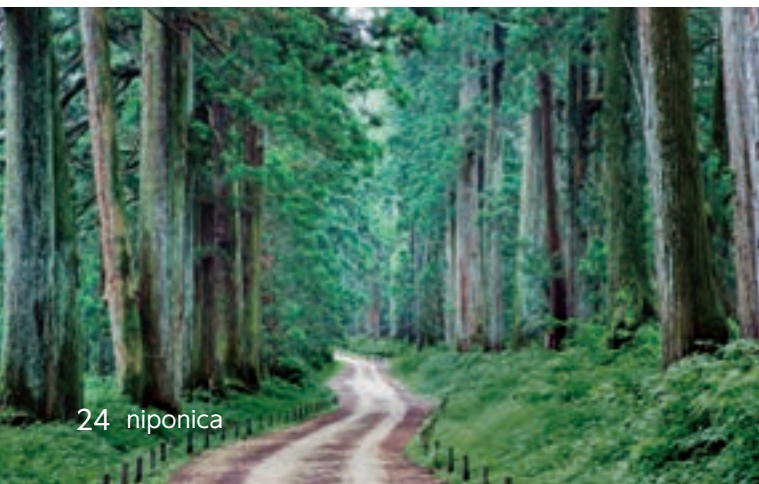
群」と、これらを取り巻く「遺跡（文化的景観）」から成る。徳川将軍家（1603年に徳川家康が開設して以来、1868年まで続いた江戸幕府の中枢）の膨大な富と権力を費やして造営された社殿と、人々の自然に対する想いが一体となってつくりあげたものだ。

日光東照宮でひとときわ目を惹くのが、きらびやかな極彩色の装飾が施された陽明門。造営は1636年。当時の一流の金属工芸や漆工芸の職人たちの技を結集してつくられた。日光東照宮では、さまざまな生き物の

彫刻や絵と出会うことができるのも楽しみの一つだ。人や動物などの精緻を極めた彫刻だけでも500点を超える。

「日光の社寺」の入り口付近には、1873年に創業された日本のリゾートホテルの草分け的な存在である老舗ホテルや、おみやげに最適な日光の伝統工芸を販売する物産品店など、歴史的な建造物が多くみられ、レトロでモダンな雰囲気を楽しむことができる。

▼ 日光杉並木街道



▼「見る、言わざる、聞かざる」の三猿

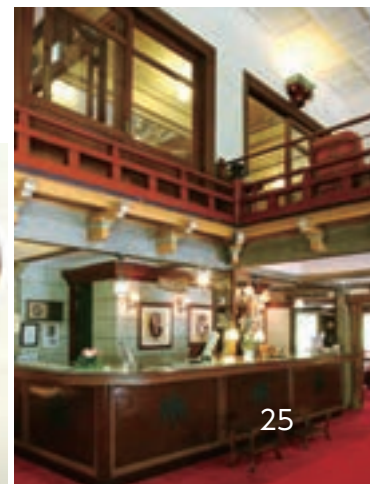


▼ 坂下門の眠り猫。日光を浴びてうたた寝する姿は、平和であるようにとの願いが込められているといわれている



▼ 老舗「日光金谷ホテル」の歴史を感じさせるフロント

▼ 「百年ライスカレー」は、秘伝のレシピを再現した伝統の味





▲いろは坂は、紅葉シーズンの人気スポット



上／ 爆音とともに豪快な水しぶきをあげる華厳ノ滝

下／ ラムサール条約*登録湿地でもある戦場ヶ原

*特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約



▲ 四季の自然が楽しめる中禅寺湖

いろは坂は、日光の市街地と奥日光を結ぶ観光道路。上りと下り、各専用の二つの坂を合計すると48カ所の急カーブがあり、秋の紅葉シーズンの絶景スポットとして人気が高い。滝が多い日光では、美しい自然を背景に、水しぶきをあげる姿を各地で楽しめるが、特に有名なのが華厳ノ滝。中禅寺湖の水が、高さ97mの岸壁を一気に落下する様子は圧巻だ。さらに周辺には、戦場ヶ原の400ヘクタールにもおよぶ湿原が広がる。展望ポイントが各所に設置されていて、変化に富んだ壮大な自然を体感できる。

日光らしい名物を味わうなら、ゆばがおすすめだ。ゆばは、豆乳を煮詰め、表面にできた膜を引き上げたものだ。肉や魚を断って修行する僧の貴重なたんぱく源として、社寺の多い日光に広まった。日光のゆばは、厚みがあり食べ応えも充分。生のままでたれをつけて食べたり、煮物や揚げ物などにして食べる。また、日光はかき氷の聖地としても知られる。冬の寒さでゆっくりと凍らせた高品質の天然氷を使ったかき氷は、ふわふわと

200年以上の歴史を持つ老舗「高井家」のゆば料理



▲ 鬼怒川の溪流を下る迫力満点のラフティング



▲ 奥鬼怒温泉

した食感で一年中楽しめる。

雄大な渓谷美に囲まれた鬼怒川では、急流を進むスリル満点のラフティングが楽しめる。さらにこの地域は、豊富な湯量を誇る数々の温泉郷にも恵まれ、心まであたたかくいやされる豊かな自然にあふれている。

日光には、数多くの社寺を建設するために、高度な技巧を持つ職人たちが日本各地から集められた。この技巧は地域の伝統工芸として根をおろし、深い味わいを伝えている。

日光彫は、特殊な彫り刀の流れるような曲線と、木の美しさを活かした日光独特の朱色の漆塗りが特徴だ。

日光下駄は、社寺に入るときの履物だった草履の底に下駄を合わせたもので、草履の表面は竹の皮で編まれている。雪や坂道が多い日光で足元が滑らないように考案された。



▲ 日光彫

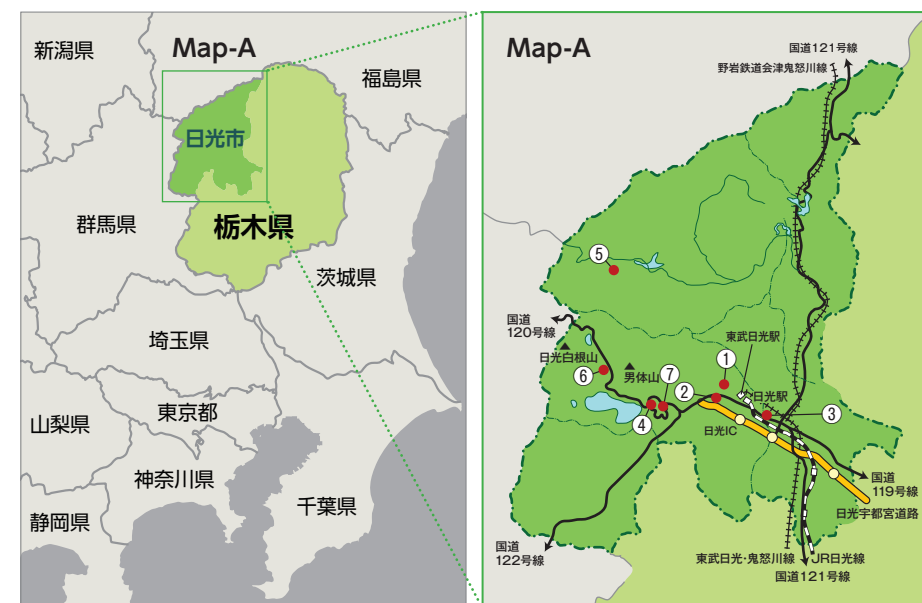


▲ 日光下駄



▲ 天然氷を薄く削ったかき氷と、甘く煮て凍らせた特産いちごの相性は抜群

日本を代表する観光地、日光。首都・東京から日帰りで行き来できるアクセスの良さも人気の理由の一つであると言えるだろう。



日光エリア地図

- ① 日光東照宮
- ② 日光金谷ホテル
- ③ 日光杉並木街道
- ④ 華厳ノ滝
- ⑤ 奥鬼怒温泉郷
- ⑥ 戦場ヶ原
- ⑦ いろは坂

●交通案内

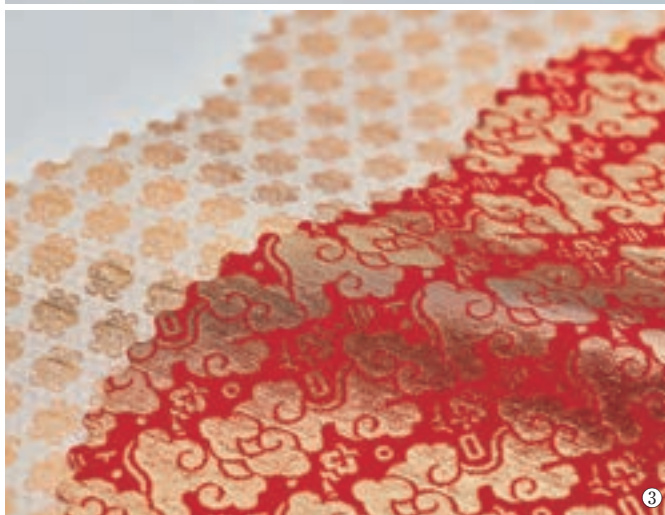
東京(新幹線で50分)⇒宇都宮(JR日光線で約40分)⇒JR日光駅
浅草(東武特急で約2時間)⇒東武日光駅

●問い合わせ

日光市観光協会事務局
<http://www.nikko-kankou.org/>



美しい織物でできた“一枚の器” 花 器



花を飾り変わりゆく季節を感じる。そんな楽しみをいつでも気軽に味わえるのが、掛け軸から生まれた“一枚の花器”だ。専用の花器がなくても、家にある空き瓶などにかぶせるだけで、華やかな花器として使える優れものである。

掛け軸とは、書や絵画などの作品の周囲に美しい布などを貼り合わせ、壁掛け用などの装飾品に仕立てたものだ。このときに使われる和文様の生地のことを表装裂といい、この織物が花器に使われている。雲や水などの自然の形態を図案化したもの、梅や松などの植物を題材にしたものなどさまざまなものがあり、豪華な金糸や多彩な伝統色に染められた糸が織りなすこの生地は、インテリアとしても魅力的なアイテムといえそうだ。

- ① 空き瓶などに水を入れて、“花器”をかぶせる
- ② 花を挿せば出来上がり
- ③ おめでたいことがおきる兆しといわれる雲をモチーフにした表装裂

協力：鳥居株式会社、イガラシデザインスタジオ